

43. 宗教と医学の接点

医事万華鏡

今年はお茶近代医学の祖であるシーボルトが来日してから200周年という記念の年に当たります。シーボルトといえば、18世紀後半〜19世紀を生きたドイツ人医師ではありますが、日本人にとってはオランダ商館医として鎖国時代の長崎を訪れ「鳴滝塾」を開設。西洋医学（蘭学）教育を通して、後に医者や学者として活躍することになる門下生を多数育てた医師といった方が馴染みがあるのではないのでしょうか。

そんなシーボルトの時代の医療を現代医療と比較することはできませんが、医学が生命を対象にしている以上、医の原点となるものは時代を経ても変わらないはず。その医の原点と言えば、紀元前5世紀に活躍したギリシヤ人医師・ヒポクラテスが示した「ヒポクラテスの誓い」が思い起こされますが、ここには患者利益の優先や守秘義務等の現代にも通じる専門職としての医師の良心・尊厳に加え、患者への配慮が示されています。確かに、ヒポクラテスはそれまでの「呪術的医療」から脱し病気を自然現象と捉え、科学に基づく医学の基礎を作ったことで「医学の祖」と称されています。しかしそこにはわれわれが医師像に期待す

る「患者に対する共感と傾聴の姿勢」が厳然としてあり、やはり時代は変わっても医の原点は変わらないのだと実感させられます。

さて、シーボルトの話に戻りますが、長崎と

いうのは特殊で宗教色の強い地域のように感じます。かつてのキリシタンもそうですが、医の原点にとって大切な「共感と傾聴」を下支えする「祈り」のイメージを長崎の国柄は纏っているように思うのです。ちなみに、米国では多くの大学が「信仰と医療」の問題を取り上げ、「祈り」が癌や糖尿病、不妊症等の病気に有効であることが実証されつつあるようです。もともと、歴史を振り返ると医学と宗教は不可分な関係にありました。西洋医学の源流であるヒポクラテス医学も、ギリシヤの医神アスクレピオスの神殿から発達し、西洋のホスピス（施療院）は中世の修道院の看護から

発達、日本でも寺院での施療は古来より行われてきました。とはいえ、「政教分離」と同様、現代では医療機関に宗教を持ち込むべきではないとされています。もちろん、悩み多き患者に、呪術的な民間療法が付け入る隙を与えるようなことはあってはなりません。しかし、そんな患者の「魂」を救うには宗教性（霊性）は必要だと思えます。ただ宗教に自省は必要で、それを経て医学と接点を持たとき、双方に調和のとれた新たな信頼関係が生まれるのではないのでしょうか。

医療がますます高度化、複雑化し、AIが医師の役割を取って代わるような時代。改めて、医の原点に思いを馳せられてはいかがでしょうか。 (JMS主幹・野村元久)

